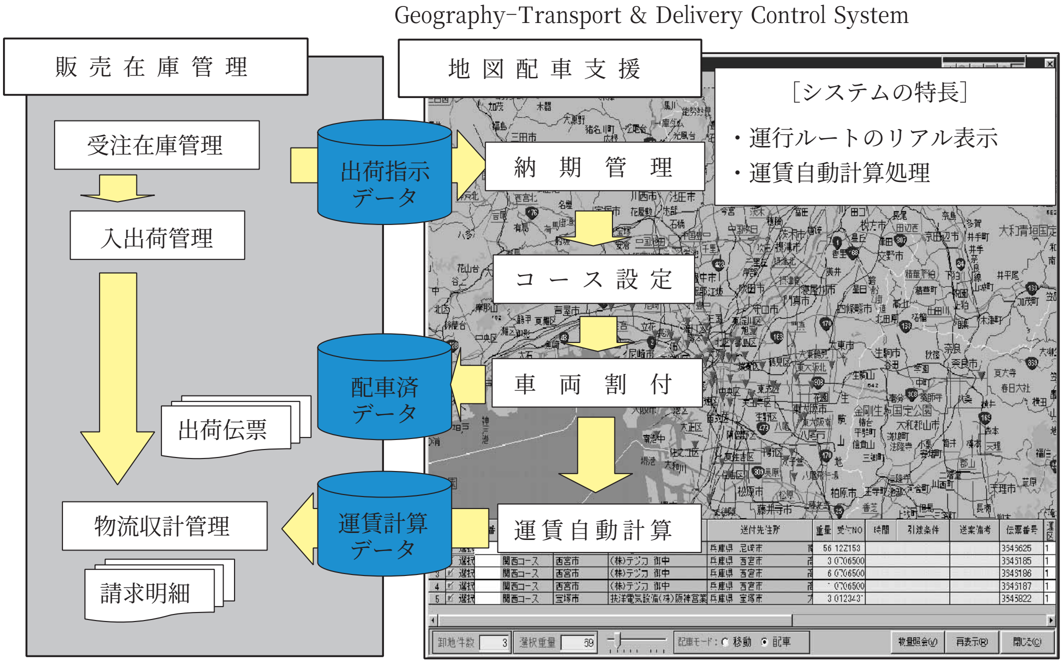
図12　配車支援システム



日刊工業新聞社　第11回流通システム大賞（奨励賞）

たシステムとして作られています。併せて、コース設定、車両割付、運賃自動計算といった機能を持っています。

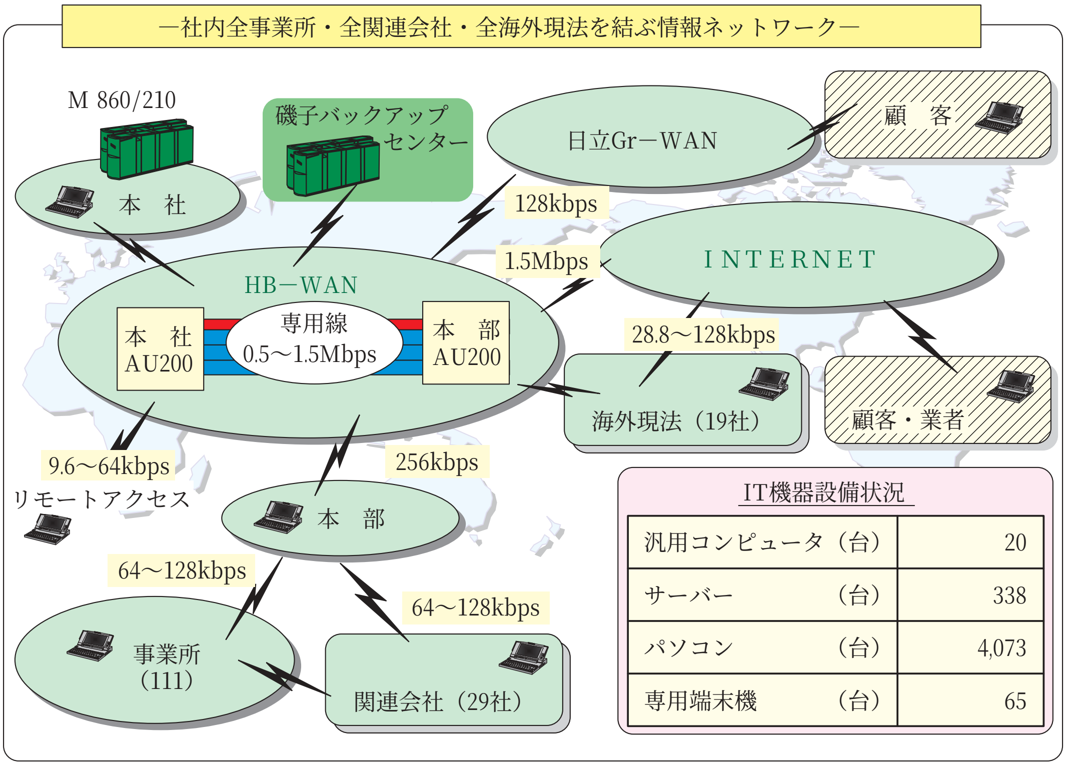
それから、当社における情報インフラ（ネットワーク）です（図13)。国内のネットワークとインターネットと書いてありますが、ここはVPN（Virtual Private Network）です。それと併せて、日立グループのWAN（Wide Area Network）を使用して、海外現地法人、顧客に使っていただくという形です。サーバー338台、パソコン4,073台、こういった機器が装備されたネットワークを組んでいます。

5　3PL事業の展望と課題

まとめになりますが、今後、SCMはますます進展して、アウトソーシングが指向され、3PLの更なる高度化が進むであろうと思われます（図14)。しかもこれはグローバルでということになると思います。当社の顧客を見ましても、ほとんどが中国を中心にした輸入物が多くなっており、グローバルな3PLという展開になっています。ただ、SCMの急速な展開の中で一方では、在庫量・輸送量が減少してきて、物流業の収益の圧迫、業界の再編ということも進められています。それから環境問題や交通混雑等の社会的問題に取り組むことにより、社会的責任の完遂を行い、これはある意味、希望になりますが、最終的には物流を夢のある事業にもっていければなと願っております。

日立物流における3PL事業の課題ですが（図15)、「WIN-WINの関係になるビジネスモデルの完成」。「グローバル3PLの高度化」、特に中国に対する取り組みを強くしていく必要があると考えています。「お客様同志の協調による新サービスの開発」ですが、現時点ではなかなか共同物流というのは進んでおりません。ようやく、我々の方の経験が蓄積され、我々から顧客に対して、“この業界とこの業界”、あるいは、A社、B社、商品で競争して、物流は一緒にやりますというような提案ができるようなベースができてきたかなと

図13　グローバル情報インフラ



汎用コンピュータ（台）	20
サーバー　（台）	338
パソコン　（台）	4,073
専用端末機　（台）	65

図14　３PL事業の展望と課題　①今後の物流業界

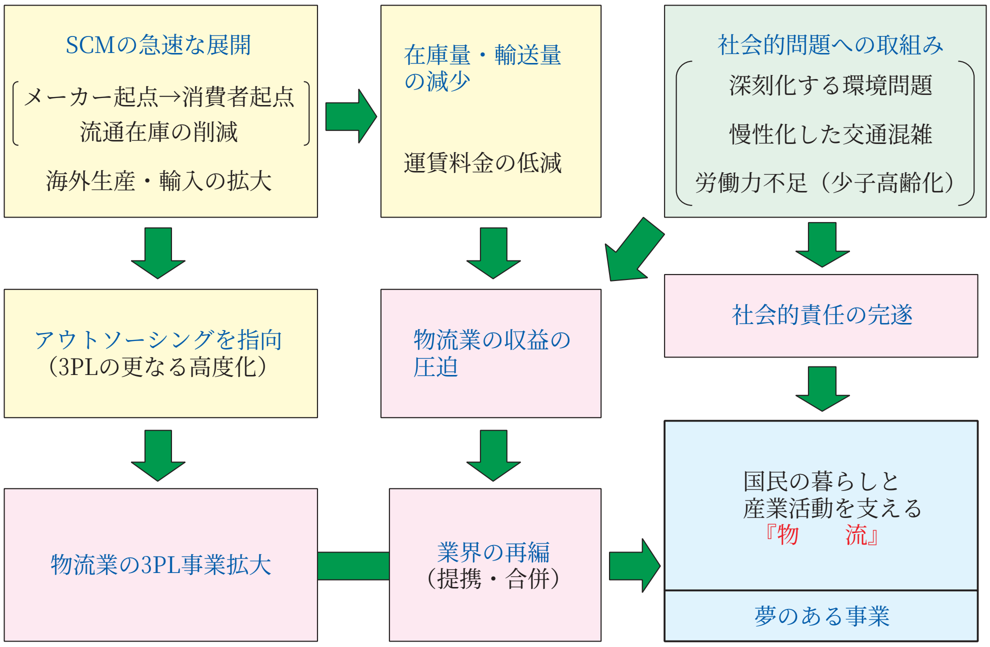


図15　３PL事業の展望と課題
②３PL事業の課題

(1)「WIN-WINの関係」になるビジネスモデルの完成

(2)グローバル3PLの高度化

(3)お客様同志の協調による新サービスの開発

(4)同業他社との協調による物流実務サービスの強化

いう感じで、これから重点的に取り組んでいきたいと思っております。

最後に、「同業他社との協調による物流実務サービスの強化」ということで、当社の弱点としては、小口配送や低温物流が挙げられます。そういったお互いの弱いところをアライアンス等によって補完しあえる総合的な展開をしていきたいと思っております。